日本古代・中世初期の都市

吉田　歓

要旨

本稿は、日本の古代・中世初期の都市について、その特質をどのように捉えられるかを検討したものである。都市といった場合、欧米の研究状況から城壁で囲まれた形態を基本として捉えられる。その場合、従来は日本の古代都城などは都市として捉えがたいといった議論が行われてきた。しかし、中世移行期の平泉の姿が発掘調査の結果、明らかになりつつあり、その成果などを踏まえることで日本の都市についても新しい理解ができるようになったと考える。これまでも各地の古代国府の分析がなされ、その特質が整理されてきた。その成果を足がかりとして、平泉の成果も加味することで日本的な都市の特質を読み取ることを目的とする。つまり都市をささえるさまざまな機能をユニットと捉えることによって都市全体を理解することができると指摘する。

キーワード　都城制　都市　国府　平泉　ユニット

はじめに

日本の歴史を語る上で都市についてどのように考えるかは大きなテーマの一つである。例えば中世の終わり頃以降は、各地に城下町が誕生し、都市と認識しやすい形態が整えられ、近代以降も都市というものが目に見える形で存在していると思われる。こうした比較的都市として認識しやすいものは良いが、中世以前になるとさまざまな理解の形があって単純にとらえることが難しくなっている。例えば、古代律令国家の首都である平城京についても、かつて都市としてとらえることができるのかどうか議論されていた[1]。中国の都城制を導入して計画的に生み出され、形の上でもグリッド・プランを持ち、ある程度の人口の集中も達成されていたであろう平城京についてさえ、都市と認識できるかどうかが議論されていたのである。都市論を体系的に論じたものとしてマックス・ウェーバーの都市分類がある[2]。ウェーバーをはじめとする社会学からする都市論が、都市を研究する上での一つの指標を提供していることになる。しかし、そうした理論だけで十分であろうか。

研究の手段としては、社会学などの成果を踏まえて現実の歴史上に生起した事象について検討することは、全く正しい方法であると言える。しかし、他分野の研究から借りてきた物差しで現実の歴史的事象を測るだけで十分と言えるであろうか。恐らく物差しでは測れないものが現実にはあり得るのではないか。つまり既存の概念規定ではとらえきれない事象がある可能性を想定しておくことも必要なのではないかと思われる。まさに都市とは、さまざまな要素が集まっているものであり、それが故につかまえどころがないものの代表例と言える。だからこそウェーバーたちもそれをつかまえようとして分析を加え議論を組み立ててきたわけである。しかし、概念を固着した瞬間、それではとらえられないものがこぼれ落ちてしまうのも、ある意味で必然であった。

都市は、このようにきわめて複雑なものであるからこそ、何か通有の普遍的な基軸となるものを設定して概念付けようとされてきたのである。しかし、その普遍的なものも簡単には考えにくい。例えば、都市概念をどのようにとらえるかといった場合、すぐに思いつくのは、都市の形状や性格、住民の性格、あるいは時代性といったことなどであろう。都市の形状については、都市全体を囲む囲郭施設の有無、町割りの有無、あるいは都市計画の有無といった点が指標として考えられよう。都市の性格については、政治都市や商工業都市、宗教都市のような分類が考えられる。住民の性格に関しては、支配階級が中心なのか、商工業者中心なのかといった問題が想定でき、また都市の運営については自治の有無なども指標として上げられよう。時代性については、古代都市なのか中世都市なのか、それぞれの時代によって何がどう違うのかといった点が問題となろう。都市を分析しようとする場合、指標となりそうな点を上げるとすれば以上のような観点がひとまず考えられるところであろう。もちろんここに上げた以外にもさまざまな視点や論点があるであろう。このように都市を概念化して、その概念を共有するのは意外と難しいことのように思われる。ほとんどの場合、都市としてイメージするものは、実際には大体共通しているように思われるが、より厳密に概念付けようとすると、一つの概念を共有するのは困難となってしまうのである。都市には、先述のように雑多な要素が混在しているわけであるが、世界史的に議論しようとすると、さらにとらえどころがなくなってしまうことになろう。ヨーロッパや中国においては都市を取り囲む囲郭施設を持っていることが特徴として見ることができる。それに対して日本の場合は、そのような囲郭施設が明確に存在していない。都市全体を囲い込んだようなあり方は中世後期になって現れてくるが、それ以前には不明瞭な状況にある。この観点に立つと、日本の都市は、都市の形を備えていなかったということになる。古代の首都に関しては、都全体を囲む羅城は作られていなかったとされてきている。しかし、平城京については、井上和人氏によって南面全体に羅城が作られていたことが明らかにされ、恐らく四面も囲んでいたと推測されている。[3] また、平安京については、山田邦和氏が羅城はなかったとしても京極は意識されていたと指摘された。[4] このように首都については、四周を囲む羅城や京の内外を意識させるものがあった可能性があり、今後の調査研究の進展を待ちたい。首都に関しては新しい情報によって左右される部分があるが、地方に置かれた国府も、国府全体を囲むような囲郭施設は現時点でははっきりとしていない。一部囲郭施設に相当しそうな事例もあるもの[5]の、やはり全国の国府にも通有のものかどうかはまだ明確にはなっていない。むしろ、後に詳しく見ていくように国府は各施設が分散的・不連続に存在していたとする金田章裕氏の理解が提示されている。[6] さらに本稿で取り上げる平泉についても、同じように現状では囲郭施設が存在していたことは確かめられていない。平泉は、日本における中世都市の先駆的なものの一つと考えられながら、都市ととらえて良いかどうかが議論されてきたのである。

以上のように、ヨーロッパや中国の囲郭都市をスタンダード・モデルと位置づけるなら、日本の古代・中世の都市のほとんどが該当しないということになってしまうのである。しかし、そのような議論の進め方だけで歴史的な理解として十分と言えるかどうかは慎重に検討してみる必要があるのではないだろうか。一つの視点のみでは、やはりとらえきれない部分が出てきてしまうのは避けられないが、その結果、歴史認識として不十分なところが出てしまっては問題であろう。豊田武氏は戦前の段階で「中世都市論」という論稿の中で、次のように述べられていた。「例へば欧洲で都市といふ言葉が、墻壁を廻らし、村落共同体より発展せしものを指すことから、それと同じものを日本に求めようとする如きである。かかる方法は素より正しいとは云えない。タウンやブルクの如き、墻壁を廻らした都市も勿論日本には存在する。然しそれが決して日本では都市の特質とはならない。」と指摘されていた。[7] 豊田氏は、ヨーロッパの都市と同じようなも

のを日本の中に探し求めようとすること自体が方法論として正しくないと明解に指摘し、墻壁というものの存否は、日本の都市をとらえる上では特質とはならないことをすでに戦前の段階で喝破されていたのである。

議論を進めるためには、ある一定の前提的な視点や基盤となる事柄を設定しておくことが必要ではあるが、個別的な問題に当たるには、そうした固定的なものにとらわれず、それぞれの事象に即して検討していくことも求められる。日本の都市もそうした事例の一つと見るべきであろう。豊田氏が指摘されたように、日本の都市の特質はヨーロッパの都市とは別のところにあったと推測される。囲郭施設を持っているかどうかは、日本の都市を理解する上で有効な指標たり得るのかを改めて見直す必要があろう。確かに囲郭施設がなくても中国には鎮市（市鎮などとも）と呼ばれる中小都市が無数に存在していたわけであり、中国においてもこのような事例があったのである。[8] 日本においても囲郭施設の有無だけでは、その本質をとらえたことにならないものと予想される。そこで本稿では、平泉をケース・スタディとして日本の古代・中世都市の特徴について検討していきたい。

第一章　平泉の展開

平泉は平安時代後期に、奥州藤原氏が政治拠点を置いたところであり、中世都市の先駆的形態の一つと考えられ、その具体的な様相は、いわゆる「中尊寺供養願文」や『吾妻鏡』などの文献史料からうかがうことができる。さらに発掘調査によって遺構や遺物が見つかってきており考古学的なデータからも多くのことがわかってきている。それらの成果を受けて、これまでさまざまな議論が行われてきた。私も大きな見通しを提示したことがある。[9] ここでは代表的な議論を簡単ではあるが整理してみたい。

まず考古学的な立場からの議論として羽柴直人・八重樫忠郎両氏の見解を見てみたい。羽柴氏は、考古学の成果を総合的に整理して、奥州藤原氏初代清衡以降の平泉がどのように発展していったかをわかりやすく示された。[10] それによると、清衡段階には柳之御所遺跡と中尊寺が主要な施設であり、両者をつなぐ道路があった程度であったと指摘された。柳之御所遺跡が清衡の居館に当たることから清衡が建立した中尊寺とその居館、さらに両者を結ぶ道路が、この段階における主要な構成要素であったということになり、この段階では都市とは見なせないとされた。それが次の二代基衡の段階になると、柳之御所遺跡の西南方に毛越寺が建設されるとともに、毛越寺から東にのびる東西道路が作られ、さらにそれに交差するような南北道路が増設されていったととらえられた。南北道路は東西道路に対して直交するものもあるが、北で少し東に傾くものもあり、平安京などの条坊制のようなきれいな碁盤目状とはならないものの、この頃から都市が形成されていったとされた。以上のような羽柴氏の所説は、都市形成の過程を考古学的に分析されたものでわかりやすい。八重樫氏も考古学的な検討を踏まえて、特に清衡段階においては都市を造営するという意図があったかどうか問題であるという重要な指摘をされた。[11]

一方、文献史学の側では斉藤利男氏が多くの論点を提示されている。本稿の関心からすると、以下の指摘などが興味深いものと思われる。平泉は清衡が宿館を江刺郡豊田館から移したところから始まるとされるが、その前史に注目され、前時代に衣川地区がすでに都市として存在していて、それに平泉地区が加わったという見通しを示された。[12] 平泉の前提となった歴史的環境を意識しなければならないことを提起されたものと言えよう。また、前川佳代氏も羽柴氏の成果をもとに平泉の都市としての発展を段階的にとらえられている。[13]

以上のような研究動向をもとに私も拙論を提示したことがある。[14] 結論的には、清衡段階では清衡の居館とその郎等たちが集住する程度であったが、この当初段階には都市を建設しようという意図はなく、他の地方武士の居館と変わりない様相であったと推測してみた。それが政治的・経済的、あ

るいは文化的な求心力が発生して徐々に都市として展開していったものと考えた。

他方、玉井哲雄氏は、柳之御所遺跡と中尊寺が道路でつながっている形も都市と認識できるという見方を提起された[15]。道路に沿うように町場が広がる都市の形もあることから、そうした形態を想定することもできるであろう。

以上、これまでの研究史をすべて紹介することはできないが、主な論点について整理してきた。それぞれ論点は異なるものの、大きくは清衡の段階では柳之御所遺跡と中尊寺、両者を結ぶ道路を主たる構成要素としていたが、基衡段階以降に面的に広がりはじめていったということは認められそうである。その上で、どのようにとらえるかが問題となってくる。一点目は、最初の清衡段階をどう評価するかという点である。すなわち、はじめから都市を建設しようとしていたのかどうかである。二点目は、その後の平泉の展開をどのように理解するかである。つまり、都市としての発展と見るかどうかが問題となる。都市として議論する場合、以上の二つのことが大きな焦点となるのではないかと思われる。私もこのような意図で検討を加え、清衡が平泉に居館を移した段階では、やはり武士の居館のあり方を逸脱するものではなく、その後のさまざまな要因が重なることで都市化していったと推論した[16]。このような見通しが妥当かどうかはまだまだ議論が必要であろうが、本稿では日本の都市の特質を大きな視点から見直しながら補足してみたい。

第二章　中国都市から見た平泉

日本の古代における都市の典型は都城であるが、その源流は中国の都城制にあった。中国の都城と日本の都城については、前著でも比較して検討を行ったことがある[17]。そこでは都城制を模倣して都を作ったのであるが、全く同じようには作られなかったことを指摘した。そこで本稿では、改めて地方の都市に焦点を当てて日本と中国の比較を行うこととする。基礎的な検討は前著で行っているので、まずはそれらのことを振り返るところからはじめたい。

地方に置かれた行政都市としては、日本の場合は国府がまずは想起されよう。中国の場合は、時代によって行政単位に変化があるが、例えば唐代には州や県などが置かれていた。中国の地方行政都市は、基本的には町全体を城壁が囲む城郭都市となっている。中国の城郭都市については愛宕元氏の一般向けではあるが詳細で有用な著書がある[18]。中国の行政都市が城郭都市であるのに対して、日本の国府は現段階では中国のような城郭都市であったとは見なせない状況にある。恐らく例外はあるかもしれないが、基本的には城郭都市のような城壁で囲まれるスタイルではなかったものと思われる。実態としては、金田章裕氏が分析されたように分散的・不連続な形態であったと考えられよう。以前にも述べたように、律令制度の上でも日本は中国のようにはなっていなかったのである[19]。中国では州・県の長官が城主として外郭施設の城門のカギとその開閉を掌っていたが、同じ規定を導入した日本では、国郡の長官が必ずしも外郭施設のカギとその開閉を掌っていたわけではなかったと思われる。多賀城などの城柵を兼ねた国府は外郭施設が備わっていたことから、国の長官である守がそのカギと開閉を掌っていたと推測されるが、それ以外のほとんどの国府はそうではなかったと考えられる。外郭施設の門のカギとその開閉を掌るのが城主であったが、それは国の長官である守すべてが当てはまるわけではなかったと想定されるのである。ということは、逆にほとんどの場合、国守はカギを掌ることがなかったことになり、それは同時に国府には外郭施設がなかったことを意味するとともに律令制度上、すべての国府に外郭施設を作ることを想定していなかったということでもある。

以上のように地方に置かれた行政都市について日中の比較をしてみる

と、外郭施設が町を囲む中国に対して、日本の国府は城柵を兼ねているような一部の場合を除くと、基本的には外郭施設を伴わない形態であったと理解される。次に中小規模の都市にも目を向けたい。これについても前稿aで触れたことがあるので、簡単にその内容を整理してみたい。

中国の都市としては、首都や州城・県城といったものが念頭に浮かぶが、そうした国家が建設したもの、あるいは関与したもの以外にも半ば自然発生的に生まれてきた中小都市が無数に存在する。それらは鎮市と呼ばれる中小規模の商工業都市である。鎮市の多くは、水運の要衝など交通の便の良いところに自然に生まれたもので、場合によっては大きく発展し、県城を上まわる規模にまで成長するものも現れている。ただ、そもそもは自然に発生してきたものであって国家が建設するようなものではない。しかし、中には大きく発展してきて国家から役人が派遣されてその管理を受けるような場合もあった。とは言ってもまずは自然に発生したところが首都や州城・県城とは本質的に異なる点である。そのことと関わって国家が計画的に建設したわけではないので、計画的な町割りは存在せず、外郭施設を伴うものではなかった。そして、水路や河川、道路に沿うように町場が発生展開していったので、中国の都市の特徴である碁盤目状の町割りには必ずしもなっていなかった。それと同時に水路や道路に沿って展開していったため、都市全体の形もきわめて不整形になっていた。このように城郭都市を基本とする中国において、鎮市はだいぶ異なった様相を示している。このように中国においても、すべての都市が城郭都市であったわけではなく、鎮市のような外郭施設を持たないものもあったのである。

一方、日本の場合も首都や国府以外にも中小規模の都市が生まれてきていた。古代では山城国の山崎などは典型的な例と言えよう。山崎は淀川と陸上交通の要衝の地であり、鎮市と共通する性格を持っていたと考えられる。もちろん鎮市をモデルに作られたとは考えられないので、普遍的なあり方の一つであったということになろう。日本でも、こうした中小規模の都市が各地に生まれていったものと想像できるのである。それでは水路や道路に沿って展開した町場とはどのようなものであったのか。現在も同様のものが各地に見られることから容易に想像できるが、遺構としては、例えば古閑正浩氏が論じられた百々遺跡の路辺遺構などは具体的なイメージを提供してくれているものであろう。[20] 百々遺跡は山陽道と想定される道路の両側に沿って建物遺構が見つかっており、恐らく道路を挟んで建物が建ち並ぶような景観であったと思われる。古代においても、このような景観が存在していたことをうかがわせてくれる事例と言える。

以上に述べてきたように、日本における地方都市には国府のように国家が建設したもの以外にも、自然発生的に展開してきたものも各地に生まれていたのではないかと推測される。そして、それらは中国の鎮市と共通するような性格を持っていて、もちろん両者に直接的な関係はないものの、ある普遍的な都市のあり方を示しているものと考えられる。中国においてもすべてが城郭都市であったわけではなく、外郭施設を伴わないものも現実には存在したのである。それは、結局は国家や権力者が建設に関与したかどうかが一つの分岐点と考えられよう。国家や権力者が計画的に建設する場合には碁盤目状の町割りや外郭施設などが備えられることが普通であったのに対して、鎮市のように国家や権力者が直接的には関わることなく自然に発生した場合には計画性もなく外郭施設もそもそも伴うものではなかったのであろう。このように城郭都市を基本とする中国社会においても外郭施設を伴わない都市があり得たのである。とするなら日本においても同様のことを認めることは許されるのではないだろうか。ここで豊田氏の指摘があらためて想起されよう。囲郭・外郭施設の有無は都市の本質とは別の問題なのである。このように理解した上で、平泉について再検討してみたい。

さて平泉について、その構成要素をあらためて整理すると次のようになる。初代清衡の段階には、清衡の居館（恐らく柳之御所遺跡）と中尊寺、

さらに両者をつなぐ道路が主要な構成要素であったと思われる。もちろんこれだけではなかったことは容易に推測できるがひとまず主なものに着目しておく。次の二代基衡段階では、やはり基衡の居館と毛越寺、そして毛越寺から東にのびる東西道路が主たる構成要素に加わったと考えられる。基衡の居館は確証はないものの、これまでも推測されてきたように観自在王院の場所にあった可能性もある。観自在王院は、もともと基衡の居館のあった場所で、彼の死後、その妻によって寺院とされ、観自在王院となった可能性が考えられるが、残念ながら確かめられてはいない。このように基衡の居館の位置に関しては未確認ではあるが、東西道路ができた点は大きな意味があろう。ついで三代秀衡段階になると、秀衡の居館として伽羅御所が登場し、それとセットで無量光院が建立される。平泉にさらに新しい要素が付け加えられたことになる。以上のことをわかりやすく示すと次のようになる。

・清衡段階…居館（柳之御所遺跡）＋中尊寺＋両者をつなぐ道路
・基衡段階…居館（観自在王院の場所か柳之御所遺跡か）＋毛越寺＋東西道路
・秀衡段階…居館（伽羅御所）＋無量光院

平泉を主な構成要素に分解すると、このように理解できよう。一方、平泉を消費地という側面から見てみたい。都市に生活する者の多くは、生産活動、特に第一次産業に直接携わることがなく、もっぱら消費する側にいることが多い。その意味では平泉についても消費地としての側面を検討してみることは重要である。

まず奥州藤原氏を中心とした支配者層について考えると、柳之御所遺跡から大量に出土するかわらけの量だけを見てもかなり大規模な消費生活を送っていたことが推測できる。また中尊寺をはじめとする大寺院の造営とその維持、さらには法会の執行などを考えれば宗教活動における消費もかなりの規模であったことも容易に想像できる。そして、このような政治的な支配者層だけではなく、中尊寺や毛越寺の僧侶たちも消費者として考える必要がある。『吾妻鏡』の記事によれば中尊寺に禅坊三百余宇、毛越寺に禅房五百余宇があったとされる[21]。この数字は、恐らく僧坊の数そのものと推測されるが、あるいは一つの僧坊が複数の建物からなっていて、そうした建物の総計という可能性もあるかもしれない。しかし、いずれにしても多数の僧侶の存在を示唆している。こうした僧侶たちは消費者としてとらえることができよう。そうすると、これらの寺院はかなりの規模の消費者人口を抱え込んでいたことになる。このように考えると、平泉は当時の地方社会においてかなり大規模な消費地であったと思われる。とするならその消費生活を支えるために、それに対応した生産と流通のシステムが発生、構築されていたことも推測されよう。こうした側面を想定できるとするなら、当時の平泉では一般的な農漁村などとは全く異なった消費生活が行われていたことになり、消費生活が大きな部分を占める大消費地であったととらえることができる。それは一般的な農漁村とは同じとは言えないのであり、この意味では都市と見ることができる。

平泉が政治支配者や宗教関係者という消費生活者を抱えた当時の地方社会においては一大消費地であったことを述べてきたが、あらためてその住民について簡単に触れておきたい。平泉の住民に関しても、やはり時間的な経過の中で考えてみる必要がある。

清衡段階は、すでに述べたように、その居館と中尊寺が主な構成要素であったと思われる。江刺郡豊田館から平泉に宿館を移したわけであるが、この段階では、恐らく清衡の居館を中心として、彼の郎等たちの家や居住する建物がまわりに作られたと想像できよう。少し離れて住んでいる者もいたであろうが、基本的には主人である清衡の居館のまわりに郎等たちの居住スペースが集まっているといった景観を想定するのが穏当ではないだろうか。その意味では地方の武士の居館と大差ない状況と考えられる。続く基衡・秀衡段階になると、様相が変わってくる。清衡段階からそうであ

ったと思われるが、清衡という政治的なコアが存在することによって、当然そこに求心力が発生してきたと思われる。その結果、いろいろな種類の人々が平泉に集まり、人口の増加をもたらしたものと想像できる。このような状況を受ける形で基衡以降、道路と居住空間が増設されていったと思われる。このようにしてある程度の計画性を持った町割りがなされるようになった結果が、毛越寺からのびる東西道路と南北道路からなる町割りであったと考えられよう。居館を平泉に移した清衡段階では恐らく都市を作り出そうという意図はなく、その後の事態の推移の中で町割りがなされていったととらえられる。すなわち、はじめは政治拠点であったものが都市へと展開していったのである。

以上、前稿aでも述べたことを若干補足しながら平泉の都市化の過程を振り返ってきた。次に、このような平泉をどのように概念化して理解したら良いのかを考えてみたい。その概念化された理論をここではユニット論と呼ぶことにするが、これは古代の都市をはじめ日本の都市の特質としても当てはまるものと思われる。

ユニットという視点で平泉を見直してみるとどうなるであろうか。まずは大きく四つのユニットが設定できる。それは、ユニットⅠとして居館とそれを取り巻く郎等たちの家、ユニットⅡとして寺院や神社からなる宗教施設、ユニットⅢとして市場や港、手工業生産といった経済機能を果たすもの、ユニットⅣとして都市住民の居住・生活する場、という四つである。

ユニットⅠ…居館＋郎等の家
ユニットⅡ…宗教施設（寺院・神社）
ユニットⅢ…経済機能（市場・港湾施設・手工業生産など）
ユニットⅣ…一般的な住民の空間

ユニットに分解すると、このように理解することができる。その上で清衡段階を考えてみると、清衡の居館と郎等たちの家、さらに中尊寺が主要な構成要素であったから、ユニットⅠとⅡから成り立っていたと言える。そして中尊寺造営には手工業生産や物資流通などが必要であり、そうしたものに従事する人たちもいたであろうから、ユニットⅢ・Ⅳもまだ大きくはないが付加的に存在したと憶測される。しかし、これらはまだこの段階ではユニットごとに併存していて、点としてそれぞれが存在していたものと思われる。それが基衡段階以降に東西道路・南北道路が通されることで面的に広がっていくことになる。つまり、当初は各ユニットがそれぞれバラバラに存在していたが、時間の経過の中でそれぞれの間が面的に埋められていったととらえることができるのである。

四つのユニットのうち平泉について特に注目されるのはユニットⅡである。清衡・基衡・秀衡の三代にわたって造営された寺院は平泉の中でも重要な位置を占めている。そこで寺院の有り様から見直してみたい。まず中尊寺は周知のように関山に立地する山岳寺院と見なせる。比叡山などと比べるとそれほど険しくはないが、山の中に建立されている点では山岳寺院と分類できよう。次の毛越寺は山中ではなく平地に立地する平地寺院である。無量光院も同様と言える。このように整理すると、寺院についても中尊寺から毛越寺・無量光院へと変遷する中で、山岳寺院から平地寺院へと立地状況が変わっていたと見ることができる。それと同時にユニットⅠも変化した可能性がある。基衡の居館がもし観自在王院の場所にあったとするなら、次のような変遷を想定できる。清衡の居館が柳之御所遺跡とすれば大きな堀で囲まれ、北上川と高館山を擁する防御的な要素が強い軍事的居館と見なせる。しかし、もし基衡の居館が観自在王院の場所であったなら平地に立地することになり、大きく性格が異なってきたことになる。言い換えると軍事的居館から平地居館へと変化したことになる。このように理解できるとすれば、ユニットⅡが山岳寺院から平地寺院へと平地に下りてきたのと同時に、ユニットⅠも平地居館に移ってきたということになる。そして、その結果として毛越寺からのびる東西道路が作り出されて町割りが形成されていく端緒を生んだと見ることができる。ただし、この推論は

基衡の居館が観自在王院の場所にあったという仮定の話である。しかし、もしそうではなかったとしてもユニットⅡの寺院の立地が平地に下りてきたことが東西道路を生み出し、面的な町割り形成へとつながったことは言えよう。

以上のようにユニットに分解することで、各ユニットの時間的な変遷をとらえ、さらにユニット相互の関係性を検討していくことによって都市形成へのプロセスを掴みやすくなるのではないだろうか。もちろん、このユニット論だけでは把握できないものもあろうかと思われるが、そうしたものも拾い上げつつ今後も検討していきたい。

第三章　ユニット論による都市像

前節では平泉に対してユニット論という視点から分析してきたが、翻って古代の国府にも目を向けてみたい。

全国の国府すべてが考古学的に明らかにされているわけではないが、現時点でわかってきている範囲では、先述のように中国の州城・県城のような城郭都市とは見なせない状況である。金田氏が整理されたように分散的で不連続な形態をしていたと理解される。そうであるなら中国の城郭都市とは全く異なってバラバラで規則性のない無秩序な空間のように見えてしまう。

しかし、ユニット論の視点から見ると違った見方も出来るかもしれない。現在知られている範囲では、国府には政庁があり、その周囲に官衙や国司館などがあり、さらに倉庫群や工房・港湾施設などが分散して存在しているように見える。まとまりや一定の規則性も見出せない。やはりバラバラで無秩序なものに見えてしまう。しかし、ユニットごとに分解してみるとどうであろうか。例えば倉庫は高燥の地に置くのが適しているとすれば、そのような場所を選んで設けられたであろうし、港湾施設もそれに適合した場所が選択されたであろう。このようにユニットに分解してみると、それぞれのユニットの機能にもっとも適した場所に配置されていたことがうかがえる。すなわち、一見バラバラで無秩序に見えるが、実は適した場所を選んだ合理的な配置であったと評価されよう。そして、それぞれのユニットが連関して機能を果たしていたのである。結果的には面的にまとまっているヨーロッパや中国の都市とは全く異なった形になってはいるが、このような形態こそが日本的な都市の形ということができるのである。

それでは何故中国などのように都市を存立させるための諸機能を城壁の内側に凝集させることができなかったのか。この点も憶測でしかないが、特にユニットⅢはそれぞれの機能に応じて適した立地条件が異なっており、それぞれを適した場所に配置した方が合理的であったのであろう。そもそも城壁内にすべてを凝集させる必要がなかった上に、各ユニットを合理的に配置した結果が、現在見えている国府像を生み出したと考えられる。その点では一定の合理性を持っていたと見ることができる。逆に城壁内にまとめた場合、それを維持するためにはむしろ多大なコストがかかることが予想される。例えば平安京も東西対称に作られ、東西市も設置したが、右京や西市を維持し続けることが困難になっていたのはよく知られているとおりである。そういう意味でもユニットごとに適所に配置しておくことは合理的であったと思われる。

以上のように国府は一見バラバラに各施設が分散しているように見えるが、実際には各ユニットが最適な場所を選んで配置され、しかも全体が有機的に連関して都市機能を支えていたと見るべきであり、このようなあり方が日本的な都市の形と言わざるを得ないのである。そして、これは古代の国府だけではなく平泉にも言えることなのである。各ユニットがそれぞれの論理で配置されていたと見る必要があろう。このように首都である平城京や平安京は中国の都城制を模倣して京内に諸機能を凝集させていたが、地方の国府ではそこまではせず各ユニットごとに合理的な配置をして

いたのである。こうした日本的な都市の形は中世都市にも当てはまるものと言える。さらに無理に京内に凝集させた平安京も程なく維持できなくなって分解していったことを考えると、日本の社会においては、やはりユニットごとに配置する形が合っていたと見ることができよう。それが一定の範囲内に凝集させられてくるのは中世後期の城下町の登場によると思われる。

おわりに

本稿では地方都市を通して日本の都市の特質に迫ることを目指してきた。平泉を素材にして検討してみると、日本の都市はユニットごとに構成されており、一見するとバラバラに見えるが実際には合理的な面を持っていたことがうかがえた。そして、それぞれのユニットが実は連携して有機的に機能していたのである。これが日本的な都市の形の一類型と考えられる。さらに、これは古代の国府についても当てはまると思われる。国府も分散的な様相を呈しているが、やはりそれぞれが国府の機能を維持するために必要なユニットとして適した場所に配置されていたのである。このようにユニットという視座を設定することによって、日本の都市をとらえることができる。

本稿では、とらえにくい日本の地方都市についてユニットという視点からアプローチしてみた。内実は従来言われてきたことと相違はないが、概念化する一助になれたとすれば本望である。また、本稿は理屈が先行してしまっていて実証面はきわめて弱体である。今後は実証的にも検討していく必要があろう。まだまだ他にも多くの課題があるが、ここで拙い小文を閉じたい。

注

(1) 狩野久「律令国家と都市」(同『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、一九九〇年。初出は一九七五年)、「古代都城研究の視角」(同書。初出は一九六二年)、鬼頭清明『日本古代都市論序説』序章都城と都市(法政大学出版局、一九七七年)。

(2) マックス・ウェーバー著・世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社、一九六四年。

(3) 井上和人「平城京羅城門再考」(同『古代都城制条里制の実証的研究』学生社、二〇〇四年。初出は一九九八年)、「遙かなる奈良の都―平城京造営の歴史的意味を問う―」(井上和人・粟野隆『平城京ロマン　過去・現在・未来』京阪奈情報教育出版株式会社、二〇一〇年)、「古代遷都の真実　飛鳥宮・藤原京・平城京の謎を解き明かす」(奈良文化財研究所『古代はいま　よみがえる平城京』クバプロ、二〇一二年)。

(4) 山田邦和「平安京の空間構造」(同『日本中世の首都と王権都市』文理閣、二〇一二年。初出は二〇〇九年)。

(5) 木津博明「国府に地割はあったか　上野国」(寺村光晴・早川泉・駒見和夫編『幻の国府を掘る　東国の歩みから』雄山閣、一九九九年)は堀跡から一定の区画を抽出されている。

(6) 金田章裕「国府域の形態・構造とその変化」(同『古代景観史の探求』吉川弘文館、二〇〇二年)。

(7) 豊田武「中世都市論」(同『豊田武著作集第四巻　封建都市』吉川弘文館、一九八三年。初出は一九四一年)。

(8) 加藤繁「唐宋時代の草市及び其の発展」(同『支那経済史考證』上巻、東洋文庫、一九五二年)、高村雅彦『中国江南の都市とくらし』山川出版社、二〇〇〇年。

(9) 吉田歓『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院、二〇一四年。

(10) 羽柴直人「平泉の道路と都市構造の変遷」(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、二〇〇二年)。
(11) 八重樫忠郎「平泉という領域」(『中世都市研究16　都市のかたち』山川出版社、二〇一一年)。
(12) 斉藤利男『奥州藤原三代』山川出版社、二〇一一年。
(13) 前川佳代「都市平泉の形成」(『平泉文化研究年報』9、二〇〇九年)。
(14) 吉田注(9)著書。
(15) 玉井哲雄「日本都市史の構築」(国立歴史民俗博物館・玉井哲雄編『アジアからみる日本都市史』山川出版社、二〇一三年)。
(16) 吉田歓「中国の地方都市と平泉」(注(9)著書。初出は二〇一三年)。以下、前稿a。
(17) 吉田注(9)著書。
(18) 愛宕元『中国の城郭都市』中央公論社、一九九一年。
(19) 吉田歓「国庁・郡庁と城柵政庁」(熊谷公男編『古代東北の地域像と城柵』高志書院、二〇一九年)。
(20) 古閑正浩「平安京南郊の交通網と路辺」(『日本史研究』五五一、二〇〇八年)。山崎周辺の道路については原田早季子「宮都に至る道―山崎周辺の古道―」(中尾芳治編『難波宮と古代都城』同成社、二〇二〇年)も詳細で参考となる。
(21) 『吾妻鏡』文治五年(一一八九)九月十七日甲戌条。

(付記) 本稿は、「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会「日本都市史のなかの平泉」(岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会、二〇一三年)において行った報告「都市平泉の建設」をもとに、JSPS科研費18K00954・JSPS科研費20H01313の助成による成果を含むものである。